

氏名	塩見邦雄 しおみくにお
学位の種類	教育学博士
学位記番号	論教博第21号
学位授与の日付	昭和55年5月23日
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当
学位論文題目	人格構造の二元性についての実験的研究

論文調査委員 (主査) 教授 梅本堯夫 教授 河合隼雄 教授 渡辺洋二

### 論文内容の要旨

本論文は、人格の基本的な次元が、主として、「外向—内向」と「不安」の2次元であることを15の実験によって示そうとしたものである。

論文は、23章よりなり、そのうち第1章より第7章まででは、これまでの主な実験人格学の諸理論の紹介と検討とがなされ、第8章以下では、実験的に人格の基本次元の要因の分析が行われている。

まず第1章においては、人格理論が、心理療法の中心問題である人格変容をとり扱えるために、学習理論を導入する必要性のあることが説かれ、歴史的にはそのような動きの中から実験人格学が生れてきたことをのべている。そして著者も基本的にこの立場に立つことが明かにされている。第2章では、不安に対する Taylor と Sarason の考え方の相違が説明され、前者では、個人のもつ特性で恒常的なものであると考えるのに対して、後者では、状況によってよび起された反応性のものであると考える点に差異があると説かれた。しかし、性格特性としての不安と、状態をあらわす不安は必ずしも無関係なものとはいえないことが指摘されている。

第3章では、Eysenck の人格理論が詳細に検討されている。それは、次元的分析の立場に立つものであり、その次元として Eysenck は、「外向性—内向性」「神経症傾向」「精神病的傾向」の三つをあげていること、そして、抑制が強く生じるような個人は、外向的な行動様式を發展させ、興奮の強い個人は、内向的な行動様式を發展させると考えていることが述べられた。

第4章では、引き続き Kretschmer, Sheldon, Pavlov, Jaensch, Witkin, Rotter, Jung, などの人格理論を検討した後、包括的で統計的な人格理論として40ちかいテストから因子分析によって2つの2次因子を見出した Cattell の研究に触れ、その2つの因子が実験的に研究を進めてきた Eysenck の見出した因子とほぼ同じで、「外向—内向」(Exvia-Invia)と「不安—適応」(Anxiety-Adjustment)であることを指摘している。

第5章では、最近の実験人格学の研究の主なものとして、Lazarus, Epstein, Spielberger の3人の研究を検討している。Lazarus は心理的ストレスのうけとめ方において、人格構造の不安次元が働くこと

を見出し、Epstein は不安の働き方に影響をもつ覚醒水準の重要性を強調し、Spielberger は、状態不安と特性不安の関係を明かにした。

いずれも不安概念の明確化に寄与している。

引き続き、第6章では、Allport の特性理論を全体としてみて、人格の次元は、不安と外向一内向の2次元が主なものであることを再度強調している。

第7章では、それらの次元を測定するために用いるべきテストとして、MPI, MAS, MMPI, R-S 尺度, YG などの関係を調査によって調べている。

第8章以下では、実験による研究がなされている。まず第8章から第10章までは電気ショックや氷水などの有害刺激に対して痛みを感じる閾値を測定し、それと、被験者の人格特性(MPI および MAS で測定されたもの)との関係を調べた。その結果、閾値は、MPI で測定された神経症傾向、及び MAS で測定された不安次元と有意な相関がみられた。すなわち、神経症傾向が高いものほど、或は、不安傾向の高いものほど痛みの閾値が低かった。第3実験では、単なる閾値ではなく、どの程度まで痛みに耐えられるかというトレランスの時間と性格特性との関係をみたところ、神経症傾向や不安傾向とも相関はあったが、第1、第2実験ではみられなかった外向性一内向性次元との間で、より高い相関関係がみられた。

実験4では、電気ショックの電圧を10Vに統一した時のそれへの反応時間が測定されているが、その結果は、神経症傾向、不安傾向の高いものほど、また内向性のものほど反応時間が遅いという結果がえられた。著者は、これを抑制がより強いために反応時間が長くなったと解釈している。著者は、下肢の痛神経に刺激を与えた時の脳波における誘発電位の潜時を測定し、それが30 msec であることから、反応時間の個人差は、このような痛みを知覚した後の刺激の処理能力の個人差によると推察している。

実験5から9までは、いずれも被験者に何らかの判断を求めその反応時間と性格特性との関係をみたものであるが、普通の状況で判断させた場合と、その実験成績が他人と比較されて被験者本人の性格の判断の資料とされるという負荷をかけられた場合とで、性格との関係が全く逆転することを示したものである。すなわち、実験5と6は2つの単語のうちの一つをどちらが役に立つか、どちらが欲しいか、どちらが美しいか、という基準で選択させ、その反応時間をみている。課題には、さらに、容易なもの、困難なものがある。その結果、普通の実験状況では、外向性のものほど、また、神経症傾向の少ないものほど反応時間が長い傾向がみられたが、教示によって課題に対する被験者のかかわりを深めると、難しい課題に対して、内向性のものほど、又、神経症傾向の高いものほど反応時間が長くなるという逆の結果がみられた。

実験7と8は、一定の速度で動くランプが遮蔽物に隠れて、終点に到達する時間を予測させる実験を行ったが、実験7では普通の状況で行ったのに対し、実験8では、時間が平均より逸脱していた時に電気ショックを与えるというストレスをかけた。その結果、性格特性と時間評価の相関は逆転し、外向性のものほど、神経症傾向の高いものほど、速度評価は短くなった。実験9では、教示で被験者のかかわりを深めたが、その結果、外向性とは負の相関、神経症傾向とは正の相関がみられている。

実験10では、重量評価を行わせたが、その結果、外向性のものは内向性のものよりも、また神経症傾向の高いものは低いものよりも客観的に重量評価をしていた。実験11では、鐘りを手渡す前の身体の動揺によって予期反応を調べ、実験12では、不快なスライドを見せる前の脈波を調べて予期反応をみたが、前者

では、向性と、後者では不安傾向と相関がみられ、同じく予期反応でも情緒的な事象の予期と他の予期とで、性格特性との関係が異なることが示唆された。

実験13では、情緒性の高い外傷語と、非外傷語に対する自由連想の反応時間が測定されたが、結果は、男性においてのみ向性と反応時間に負の相関がみられ、神経症傾向とは、外傷語で正の相関がみられたにすぎない。実験14は、自転車こぎに負荷を入れたエルゴメーターを8回こがせる実験であるが、外向性の者の方が内向性の者よりも長い時間こぐという結果がえられている。

実験15では、脳波の $\alpha$ 波周波数、タッピング能力、握力、性格検査(MPI)および知能検査(NX)などの結果を総合して因子分析を行い3つの因子をえている。第1因子は、皮質活動を保持する基本的な興奮を示す因子、第2因子は神経症次元、第3因子は、外向性—内向性の因子であると解釈された。第1因子が生理的レベルでの個人差をあらわすものであるとすると、第2、第3の因子が人格の基本的な2つの次元であり、実験状況の構造に応じて一方が或いは両次元が作用していると、著者は、結論づけている。

### 論文審査の結果の要旨

本論文は、人格の次元に関するこれまでの諸理論と実験的研究を検討した後、人格の主要な次元である「外向—内向」と、「不安」又は、「神経症傾向」が関連すると思われる実験状況を設定し、15に及ぶ実験を行って、それらの人格次元と実験結果との間の相関関係が実験状況によって異なることを示したものである。

人格を単なるテストや観察によるものでなく、実験的に研究することは、実験の測度が非常に精密で信頼度の高いものであるだけに、大いに期待されていたことであるが、人格特性の査定された多くの被験者によって、数多くの実験を一貫して行うことは、諸種の事情から容易ではなかった。著者は主としてMPIおよびMASによって人格特性の査定された学生を被験者とし、数多くの実験を一貫して行い、その結果を、これまでの人格心理学の研究者たちの実験結果の理論的考察と併せて、人格構造の基本的な次元が主として「外向—内向」と「神経症傾向」又は、「不安」の2次元であることを示した。それらの実験結果は、いずれもおおむね著者の結論を支持している。

神経症次元と向性とが、実験状況によって異なった関係を見せていることは、いくつかの実験結果にみられる。例えば、実験5でみられた選択判断の時間と向性および神経症傾向との関係が、実験6のように教示で実験に対する被験者の自我関与を高めると、向性と神経症傾向との関係が全く逆転した結果や、実験7でみられた速度評価と人格特性との関係が変化し、それが単なる教示による自我関与とまた異なった様相を示している結果など、かなり明快な事実が実験的にえられている。また最終的に行われた因子分析でも生理レベルの因子の外に、外向—内向と不安又は、神経症の因子が明確に抽出されている。このような結果は評価することができよう。しかし、実験でえられたこのほかの多くの事実が、一義的に著者のいう2次元ですっかり明確に解釈されたわけでもない。その上著者の解釈はやや単純にすぎて考察の不十分な点がみられる。また人格の次元として Guilford や Cattell のような多次元を立てる説との関連が十分に論ぜられていない。また英国やソ連で行われている最近の実験人格学の成果も十分にとり入れられているとは言い難い。

にもかかわらず、一貫した見地から多くの実験が行われ、おおむね、著者の意図した線に沿った結果が得られているこの論文は、この分野の研究の進展に資する研究として、その意味は十分に認められるであろう。またこのような人格の特性を理解し、認知しておくことは、著者も述べているように、教育における適性処遇の問題を解決する基礎となることは疑いを入れない。

よって、本論文が教育学博士の学位論文として価値あるものと認める。